想像からはじまる可能性

百合学院中学校　三年　豊田　優喜子

色鉛筆や絵の具から、肌色という表示が無くなったことを知っていますか。近年は、外国からの旅行者や、日本に定住するいろいろな国の人に出会う機会も多くなりました。肌の色だけでなく、言語、習慣、宗教も様々です。そのことに気づいた企業は、肌色という表示をやめ、うすだいだい色やペールオレンジと表示をあらためたのです。

肌の色が様々であることは、人種間だけではありません。日本人同士でも、色白な人、色黒な人もいます。同一人物でも、日焼けで一時的に肌の色は変わります。それでも、どこかで日本人の肌の色は、こんな色だというイメージがありませんか。

私の祖父は二歳の時、乗っていた船の火災にまきこまれました。二歳といえば元気に動き始める年頃です。海運業を営み忙しかった曽祖父母は、祖父をヒモで柱にくくっていたのです。その結果、祖父は逃げることができず、顔全体と頭の左側、手で顔をかばったのか両手の甲にも火傷を負い、小指は少し曲がっていました。昭和二十年の事故です。よく命があったものだと田舎では、みんなが祖父の話をしていたそうです。小学校入学時の祖父の写真と、私が知っている祖父の顔は、少し印象が違っていました。祖父は何度か顔の手術をしていたそうです。現代の整形手術のように元通りに近づくことはありませんでした。それでも、当時としては失明することなく、食事ができ、会話ができるようになったことは、奇跡だったのかもしれません。

幼稚園の時、敬老の日のイベントで絵を描きました。私は何のためらいもなく、父方母方の祖父母を描き、顔の色はみんな同じ、うすだいだい色で塗っていました。その絵を見て、母が突然泣き始めたのです。

母も保育所の時、お父さんの絵という題で絵を描いたそうです。母は、自分の父の顔が肌色一色で描ききれないとわかっていました。それでも、どう表現していいかわからず、肌色で描いたそうです。クレヨンで塗りながらとても悲しく、なんだか父に申し訳なく、本当は描きたくない気持ちだったと。すると、周りの子たちは、「恵ちゃんのお父さん、こんな顔じゃないじゃろ。もっと変な色じゃ。」と言いはやしてきたというのです。私は聞きながら、なんだか悔しく腹が立っていました。そして母が「父さんも本当は、火傷のないきれいな肌の方がいいと思ってたのかな。」と言った言葉で、私も一緒に泣いてしまったことを覚えています。

私は中一の時に突発性側湾症と診断されました。原因は不明で、背骨がS字状に曲がっていく病気です。この二年半で少しづつ進行してしまい、今は服を着ていても体が曲がっているとわかるくらいになっています。日常生活に大きな支障は感じませんが、将

来への不安は持っています。自分の不摂生で、背骨が曲がったんじゃないのにと、やりきれない感情も湧いてきます。大好きなプールや温泉なのに、人々が私の体を見ているのではないかと、気をまわしてしまうこともあります。

そんな私は、母に祖父の話を聞きたいと頼みました。外を歩けば祖父の顔をジロジロ見たり、逆に、オバケを見たように顔をそむける人もいたり。広島出身の祖父は、原爆で火傷したのかときかれたこともあったそうです。でも、私の覚えている祖父は、いつも顔をあげて歩き、大声で笑う人でした。世間の人々の反応の中で、祖父はどんな気持ちで生きていたのでしょうか。

今年の夏は、オリンピックが開催され、世界各国の人がリオに集まっていました。開会式で国名と選手が紹介され、画面いっぱいに笑顔が映った時、なんだか感動しました。おそらくあの会場には、肌の色や宗教で人間の優劣を決める人はいなかったでしょう。正々堂々プレーする選手の姿は美しく、勝ち負けを越えて互いをたたえあうシーンを何度も見ました。そこに国境や差別はありませんでした。

でも、世界のいたる所には、差別もいじめも戦争も存在しています。地域で、学校で、私の周りでも不当な扱いをされ、辛い思いを抱えて生きている人がいるかもしれません。

どうすれば、全ての人の尊厳が守られ、その人らしく安心して生きていけるのでしょう。

十四歳の私は今、これまでの固定概念を捨て、想像してみることから始めようと決めました。車いすの人がいたら、白杖の人がいたら、病気の人がいたら、外国の人がいたら、いじめられている人がいたら、悲しんでいる人がいたら、もしも、それが私だったら。「みんなちがってみんないい」金子みすずさんの詩が、私に勇気をくれます。

悲しみを共有する方が、喜びを共有するより難しい気がします。私は、喜びも悲しみも共有しあえる、心に寄り添えるような人になりたいと思います。